

語学養成法

Junko Higasa

英文学者である夏目漱石の明治四十四年の談話に『語學養成法』というのがある。これは今読んででも正論。未だに日本の英語教育が低迷している理由がよくわかる。

まず明治時代の知識人に語学力があった理由は、当時は日本の教育制度が整っておらず、外国の教科書を用いていたから。しかも日本人教師が教える地理・歴史・数学の講義まで英語で行われていたそう。さらに漱石より上の年代では試験の答案を英語で書いた人もいたらしい。だが、漱石はそれを独立国家としての日本の屈辱であると言いつつも、井上毅氏が文部大臣であった頃、国語漢文を復興して外国語を抑制したことが語学力の減退につながったと目している。従って語学力低迷は当然であるという。そこで改良の三要点として、漱石は「時間・教授法・教師」を挙げている。

まず教授法から取り上げると、実力のある人が教授法を作っても、教授法自体が活動するわけではなく教師が教える訳であるから、それを使いこなせる教師がいなければ教授法は役立たないという。つまり教師の能力が問われる。そして教授法は分割して作って教師が分担するのではなく、一人の教師が「話す・書く・読む・訳す」を総合してできなければ、全一通りこなせる生徒を育成できないという。まさに今時の分業体制の能力の欠点を見事に指摘している論と言える。

次に教師であるが、不適当な教師でも学者にはなれるから、大学は不適当な教師を作っている。いっそのこと各高等学校に生徒を分散させず、一高等学校に集めて特別教育を施して大学へ送り込み、語学教師を育成する。それが万遍なく語学力を持つ教師育成の唯一の方法と信じる、とある。そこまでやれば確かに総合力がつくだろう。

さらに教師の試験を行うことを挙げる。ここで私の頭に浮かぶのはアメリカの認定医制度である。国家試験に合格しても何年か毎に試験がある。もちろん能力のない者は医師免許を更新できない。そのために医療費が高額という難点があるが、これがあれば藪医者や、ましてや偽医者は存在しない良い制度だと思う。教師においてもこの更新試験があれば教育者の実力は落ちないだろう。そのためには教師の報酬 UP も必要か。漱石はこれを施行することによって、教師も当局者も便宜を得るだろうという。

また、教科書問題であるが、この当時の生徒は知らなくてもよい字を覚えて、必要な字を覚えていないという。現代風に言えば生きた英語ではないものを習っているということだ。漱石は外国の新聞をテキストにすればよいと言っている。そうすれば 365 日中で繰り返される単語を覚えられるし世界経済が解るといふ。正に生きた英語学習。

さて、教授法と教師の次は「時間」であるが、教師が「会話」「文法」「訳読」と分担することは各医療の専門家を作るようなもので、漱石は研究のためにはよいが教育としてはよくないと言っている。文法を離れて訳はなく、訳を離れて文法はない。従って時間で区切らず一人の教師が融通の利くように教えなければならないという。

全く、このような漱石の談話原本は日本の文部科学省に是非読んでもらいたい。秋入学で留学促進などと言っている間にすでに東大はハーヴァードの滑り止めになっている。まるで『草枕』に出てくる『トリストラムシャンディー』ではないか。教育マニュアルを作っている間に、少ない子供は一人残らず老人になってしまう。(2013.2.23)